

## 『源平闘諍録』全釈 (二―卷一上① (三才、四才8))

早 川 厚 一

## 凡 例

本稿は、【原文】【釈文】【校異・訓読】【注解】【引用研究文献】の五部分から成る。以下、各々について凡例を記した後、【注解】に共通する略号の一覧を掲げる。

## 【原文】

- (一) 底本とした内閣文庫蔵『源平闘諍録』を翻刻した。
- (二) 字体は、一部の異体字を除き、現在通行のものに改めた。片仮名の合字などについても同様である。但し、『源平闘諍録』などに特有の異体字については、そのまま残すように努めた。
- (三) 底本に目次はあるが、章段名は無い。該当箇所に着段名を記す。
- (四) 底本の影印本 (内閣文庫蔵『源平闘諍録』、和泉書院一九八〇・二) に付された丁数を、新たな丁に移る最初の字の右側に、「▽一才」(一丁表) といった形で示した。
- (五) 底本の一部にある改行・一字下げなどはそのまま生かした。
- (六) 底本にある傍書・補入は「」に入れ、割注は「」に入れて示した。

(七) 底本には全体に訓点(送り仮名・返り点)がある他、部分的(巻一上の一部・巻一下・巻八上)に、ヲコト点の他、朱による訓点・送り仮名が付されている。ヲコト点による訓は、平仮名で示した。また、朱によるものは、(一)で括り区別した。なお、底本のヲコト点については、拙稿(「源平闘諍録の真字表記」松村博司先生喜寿記念『国語国文学論集』右文書院一九八六・11)を参照されたい。

(八) 底本にある音読符・訓読符については、採録するように努めた。

### 【釈文】

(一) 右記の原文を、訓読文(仮名交じり文)に書き下した。本来は漢文体である書状の類も、すべて書き下した。

(二) 底本には一部に改行があるが、釈文では底本の改行に関わりなく、内容によって段落分けし、改行した。

(三) 誤字・宛字と思われるものや、仮名遣いや文法などの面で現在の基準に合わない字については、正しいと思われる字を当て、その下に底本の用字を(一)内に入れて示した。

(四) 助詞・助動詞にあたる漢字、「自・從(より)」、「乍(ながら)」、「可(べし)」、「被(る・らる)」、「之(の)」、「乎(か)」、「如(ごとし)」、「也(なり)」などは、平仮名に改めた。

(五) 訓読にあたっては、底本などにある訓点を生かすように努めたが、それによるだけでは必ずしも完全な書き下し文にはならない上、訓点の中には誤りと見られるものもあるため、それによらずに私意に書き下した場合もある。そこで、底本に存する訓点による訓と校訂者の読解による訓とを区別するために、底本に存する訓点(送り仮名・振り仮名・ヲコト点)に従って付けた送り仮名などはゴチックで示した。それ以外の仮名は、校訂者の判断で付したものである。

(六) 右のゴチック部分について、助動詞にあたる漢字「可」「被」「不」等、及び訓点中の「玉・下(たまふ)」等に

については、次のように処置した。

- 1、いずれも、振り仮名が付いている場合は、その振り仮名に従ってゴチックにした。
- 2、振り仮名・送り仮名が付いていない場合は、「可」「玉下（たまふ）」「被（らる）」等については、語幹のみゴチックとした。固定的な語幹の無い「被（る）」「不」等は、ゴチックにしなかった。
- 3、振り仮名はないが、送り仮名または送り仮名に当たるヨコト点がある場合は、その訓点によって確定できる訓をゴチックとした。

(七) 振り仮名は、底本にあるもの（ヨコト点を含む）を片仮名、私意によるものを平仮名で示した。この点、原文の欄における平仮名（ヨコト点を示す）とは意味が異なるので、注意されたい。なお、片仮名の振り仮名については底本の形のままとし、濁点を付さなかった。

(八) 送り仮名は現在の一般的基準に従い、底本にないものも多く送った。

(九) 底本にある傍書・補入は「」に入れ、割注は「〜」に入れて示した。

(一〇) 底本に明らかな脱落がある場合、推定される脱字を私意に補い、「《》」に入れて示した。

(一一) 反復記号（おどり字）は、基本的に原文のままとしたが、書き下しにより原文と文字の順序が異なる関係で、通常の文字に置換した場合がある。

(一二) 原文の丁数及び校異番号については、原文に対応する箇所注記した。

### 【校異・訓読】

(一) 闘諍録の訓読上の問題点を扱う。

(二) 校異・訓読番号は、原文・釈文に共通で対応する。

## 【注解】

- (一) 闡諍録の読解上の問題について、いわゆる語釈の範囲を超えて注記・解説を記した。既成の注釈に記されている事柄には敢えて触れず、新たな問題点の発掘に努めるようにした。
- (二) 項目は、釈文の一部を示す形で立項した。
- (三) 闡諍録以外の『平家物語』諸本との異同はここで扱う。但し、異同を網羅しようとしたものではない。
- (四) 古典作品や記録などの文献の引用に際しては、本文に句読点・訓点などを私意に加えた。なお、原文に割注がある場合は、へい内に入れて示した。
- (五) 研究文献の引用に際しては、原則として文中には論文著者名を記すのみで、各章段末に【引用研究文献】の欄を設けた。

## 【引用研究文献】

- (一) 著者名は、五十音順で列挙した。発行年月は、西暦により「一九九〇・五」（一九九〇年5月）のように示す。同一章段内に同一著者の論文を複数引く場合には、引用順に「名前①②」等のように番号を付し、区別した。但し、左記のように略号を設定したものは掲げていない。

## 〈略号〉

【注解】及び【校異・訓読】欄では、左記の諸書については略号を以て示した。

○『平家物語』諸本…左記の諸本については略号を用い、各々の刊本により頁数または丁数を示した。

〈四〉……四部合戦状本。『四部合戦状本平家物語』（汲古書院一九六七）影印。

〈闘〉……源平闘諍録。『内閣文庫蔵・源平闘諍録』（和泉書院一九八〇）影印。

〈延〉……延慶本。『延慶本平家物語（一～六）』（汲古書院一九八二～三）影印。

〈長〉……長門本。『岡山大学本平家物語二十卷（一～五）』（福武書店一九七五～七七）翻刻。

〈南異〉……南都異本。『南都本・南都異本平家物語（上・下）』（汲古書院一九七二）影印。

〈盛〉……源平盛衰記。『源平盛衰記慶長古活字版（一～六）』（勉誠社一九七七～八）。

〈南〉……南都本。『南都本・南都異本平家物語（上・下）』（汲古書院一九七二）影印。

〈屋〉……屋代本。『屋代本平家物語（貴重古典籍叢刊）』（角川書店一九六六）影印。

〈覚〉……覚一本。『平家物語（上・下）』（新日本古典文学大系）（岩波書店一九九一～九三）翻刻。

○辞書・参考書・注釈書その他

〈日国大〉……『日本国語大辞典第二版』（小学館二〇〇〇～二〇〇二）

〈吉田地名〉……吉田東伍『大日本地名辞書』（富山房）

〈角川地名〉……『日本地名大辞典』（角川書店）

〈平凡社地名〉……『日本歴史地名大系』（平凡社）

〈姓氏〉……太田亮『姓氏家系大辞典』（角川書店）

〈名義抄〉……『類聚名義抄』（観智院本。風間書房一九五四～五五）

〈尊卑〉……『尊卑分脈』（国史大系）

〈補任〉……『公卿補任』（国史大系）

群書……………『群書類従』(統群書類従完成会)

統群書……………『統群書類従』(統群書類従完成会)

〈略解〉……………御橋惠言『平家物語略解』(宝文館一九二九)

〈評講〉……………佐々木八郎『平家物語評講(上・下)』(明治書院一九六三)

〈全注釈〉……………富倉徳次郎『平家物語全注釈(上・中・下)』(角川書店一九六六・六八)

〈集成〉……………水原一『平家物語(上・中・下)』(日本古典集成)(新潮社一九七九・八二)

〈四評釈〉……………早川厚一・佐伯真一・生形貴重『四部合戦状本平家物語評釈一〇九(巻一〇五)』(一〇四は名古屋

学院大学論集(人文・自然科学篇)所収一九八四・一〇一九八五・五〇九は私家版一九八五・

一〇九・一九九六・一〇二

〈四全釈〉……………早川厚一・佐伯真一・生形貴重『四部合戦状本平家物語全釈』(和泉書院二〇〇〇)

〈全注闕〉……………福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録(上・下)』(講談社一九九九・二〇〇〇)

〈延全注釈〉……………延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈第一本(巻一)』(汲古書院二〇〇五)

なお、これらの諸書の他にも、多くの研究を参考とさせていただいた。特に、山下宏明氏による未刊国文資料『源平闘諍録と研究』(一九六三・三)には、原文の翻刻の際に大いに参考とさせていただいた。

# 【原文】

源平闘諍録卷第一上

## 一 自桓武天皇平家之一胤事

祇蘭精舎之鐘<sup>ニ</sup>声有<sup>ニ</sup>諸行無常<sup>ヲ</sup>響沙羅雙樹之花色<sup>ハ</sup>顯<sup>セリ</sup>盛者必衰理<sup>一</sup>驕人<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>久<sup>ラ</sup>只如春夜之夢<sup>ノ</sup>武者遂殄<sup>メ</sup>偏<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>風前之塵<sup>ニ</sup>遠<sup>ク</sup>訪<sup>テ</sup>異朝者秦趙高漢王莽梁周異唐<sup>ノ</sup>祿山此等者皆不<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>旧主先皇政<sup>ニ</sup>極<sup>メ</sup>樂<sup>ミ</sup>不<sup>レ</sup>容<sup>レ</sup>諫<sup>イサ</sup>不<sup>レ</sup>覺<sup>ニ</sup>天下乱<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>民間所<sup>レ</sup>愁<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>久失<sup>ニ</sup>者也近<sup>ニ</sup>尋<sup>ニ</sup>本朝<sup>ヲ</sup>者承平將門天慶<sup>ノ</sup>純友康和義親平治<sup>ノ</sup>信賴驕心<sup>モ</sup>武事<sup>モ</sup>取<sup>テ</sup>々有親入道大政大臣平清盛<sup>ケル</sup>申<sup>ル</sup>人有<sup>ニ</sup>様<sup>ヲ</sup>伝<sup>フ</sup>聞<sup>ケル</sup>不<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>心<sup>モ</sup>言<sup>フ</sup>

## 【釈文】

▽三才  
源平閼諍録卷第一上

## 一 桓武天皇より平家の一胤の事

祇蘭精舎の鐘の聲、諸行無常の響き有り。沙羅雙樹の花の色は、盛者必衰の理を顯せり。驕れる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし。武き者も遂には殄びぬ(め)、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝を訪へば、秦の趙高・漢の王莽・梁の周異・唐の祿山、此等は皆旧主先皇の政にも随はず、樂しみを極め、諫めを容れず、天下の乱れをも覺らず、民間の愁ふる所をも知らざりしかば、久しからずして失せにし者なり。近くは本朝を尋ねれば、承平の將門・天慶の純友・康和の義親・平治の信賴、驕れる心も武き事も取々にこそ有りしかども、親くは入道太(大)政大臣平清盛と申しける人の有様を伝へ聞くこそ、心も言も及ばね。

【注解】○殄びぬ 『類聚名義抄』に「殄 ホロフ」(法下一三二八)。(閼)では、他に「幽王遂被<sup>ホロホ</sup>殄畢」(二下—二二ウ)、「我身子共同殄矣」(二下—二八ウ)等。○梁の周異 「周異」、(四・延・長・南)同、(盛・覺)「周伊」、(屋)「朱异」。

「朱异」が正しい。鎌倉時代に盛んに読まれていた『仮名貞觀政要』によるとも言われる(乾克己)。「秦二世皇帝ハ

深キ宮ニコモリキテ、人ニ見エズ。趙高ヒトリヲ信ジテ、天下ノコトヲマカセシカバ、国々ソムキテ、都ニセメ入コトヲシラズ。梁ノ武帝又朱異ヒトリヲ信ジテ、アマネク臣ノ申スコトヲキカザリシカバ、侯景ガ兵アツテ、宮ニムカヒシヲシラズ」(『仮名貞觀政要』)。

○平治の信頼 例として挙げられる将門・純友・義親は武臣であり、それらが、「武き」者達であつたとされる点からしても、「平治の義朝」の方がふさわしいが、義朝ではなく、また「保元の為義」の事例が記されないのは、『平家物語』が作られた時代環境を示唆するか。

○親くは (四・延・長・盛・南・屋・覚)「間近ク」(延)。「類聚名義抄」に「親シタシ、チカシマノアタリ」(仏中八一4)。同様に訓む例としては、「親」二条院御宇永暦元年(一一一ウ)。「闘」には、「まのあたり」と訓む例も多い。

### 【引用研究文献】

\*乾克己「宴曲における貞觀政要の享受」(和洋国文研究4、一九六六・10。『宴曲の研究』桜楓社一九七二・3再録)

### 【原文】

尋<sup>ニ</sup>其先祖<sup>ヲ</sup>者桓武天<sup>ノ</sup>〈柏原天皇〉第五ノ王子一品式部卿葛原親王九代後胤讚岐守正盛之孫刑部卿忠盛<sup>▽三ウ</sup>朝臣之嫡男也彼親王ノ御子高見王<sup>ハ</sup>無<sup>ニ</sup>官無<sup>ニ</sup>位<sup>ヲ</sup>失<sup>テ</sup>給<sup>ニ</sup>其御子<sup>ニ</sup>高望ノ王<sup>ヲ</sup>時淳和天皇御宇天長年中比忽<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>王氏<sup>ヲ</sup>烈<sup>ニ</sup>人臣<sup>ニ</sup>始<sup>ニ</sup>賜<sup>ニ</sup>平朝臣姓<sup>ヲ</sup>任上総介<sup>ニ</sup>

### 【釈文】

其の先祖を尋ねれば、桓武天<sup>ノ</sup>《皇》〈柏原天皇〉第五の王子一品式部卿葛原親王九代の後胤、讚岐守正盛の孫、刑部卿忠盛朝臣<sup>▽三ウ</sup>の嫡男なり。彼の親王の御子高見王は、無官無位にて失せ給ひぬ。其の御子に高望の王の時、淳和天皇の御宇、天長年中の比、忽ちに王氏を出でて人臣に烈なり、始めて平の朝臣の姓を賜はり、上総介に任ず。



【注解】○桓武天皇〈柏原天皇〉「柏原天皇」の注記は〈閼〉のみ。巻五の成胤の名乘に、「柏原/天皇/后胤/平親(王)将門」十代/末葉千葉/小太郎成胤(卷五三〇ウ)とある。○淳和天皇の御宇、天長年中の比… 具体的に年月

日を記すのは、〈四〉「寛仁二年五月十二日」、〈延・長〉「寛平二年五月十二日」、〈盛〉「寛平元年五月十二日」。〈四〉の「寛仁」は、「寛平」の誤りだが、この後に引く「千葉大系図」(房総叢書)や「平家勘文録」も同様の誤りを犯す。〈閼〉の「天長年中」は、『般若院系図』(統群書6上―二二五頁)も同様の誤りを犯すが(全注閼)上―二六頁)、『本朝皇胤紹運録』(群書5―三三三頁)・「相馬系図」(統群書6上―二二二頁)に見るように、高望王の叔父高棟王との混同が原因だろう(四評釈)一―六頁)。「天長二閏七賜平姓」(『本朝皇胤紹運録』)。「尊卑分脈脱漏」は、「承和二年閏七月」として、「承和」に「天長」の異本注記を施す(統群書5上―一二四頁)。なお、高望王の賜平姓、任上総介を、系図・記録類で、寛平元年のこととするのが、『系図纂要』(七下―四七五頁)・「尊卑分脈脱漏」(同右)・「伊勢系図」(統群書6上―一〇二頁)・「総葉概録」(房総叢書二五九頁)、寛平二年のこととするのが、『千葉系図別本』(以下統群書6上―一七〇頁)・「相馬系図」(二二二頁)・「長尾系図」(二五〇頁)・「千葉大系図」(五頁。但し、統群書本は、「同(寛仁)二年五月十三日」(統群書6上―四〇頁)とする)・「千葉家系図 当寺世代 当寺実録」(千葉市立郷土博物館研究紀要9)。なお、『平家勘文録』も「同(寛仁〔平敷〕)二年の五月十二日」(統群書19下―二二七頁)とするが、寛平二年の誤伝。寛平三年のこととするのが、『妙見実録千集記』(妙見信仰調査報告書三、九二頁)。寛平元年の記録は、『日本紀略』寛平元年五月十三日条の「賜平朝臣姓者五人」と関わろう。

## 【原文】

彼高望<sup>(一)</sup>有<sup>(二)</sup>十二人子嫡男国香常陸大掾為将門<sup>(三)</sup>被誅<sup>(四)</sup>次男良望鎮守府將軍是將門父也三男良兼上総介与<sup>(五)</sup>將

門<sup>ニ</sup>度々企<sup>テ</sup>合戦<sup>ヲ</sup>終<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>討<sup>テ</sup>了<sup>ル</sup>四<sup>ノ</sup>男以下<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>子不<sup>レ</sup>繼<sup>ス</sup>子孫<sup>ヲ</sup>第十二末子良<sup>ノ</sup>文村岡<sup>ニ</sup>五郎為<sup>ニ</sup>將門<sup>ヲ</sup>雖<sup>モ</sup>為<sup>ニ</sup>伯父<sup>ト</sup>成<sup>ニ</sup>養子<sup>ト</sup>傳<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>芸<sup>ヲ</sup>威<sup>ヲ</sup>將門隨<sup>ニ</sup>八箇<sup>ノ</sup>國<sup>ヲ</sup>弥<sup>ニ</sup>構<sup>ニ</sup>凶惡<sup>ノ</sup>之心<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>憚<sup>ス</sup>神慮<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>恐<sup>ス</sup>帝威<sup>ニ</sup>檀<sup>ニ</sup>侵<sup>ニ</sup>仏物<sup>ヲ</sup>飽<sup>ニ</sup>奪<sup>ニ</sup>王財<sup>ヲ</sup>之<sup>ノ</sup>故妙見大菩薩出<sup>テ</sup>將門之家<sup>ヲ</sup>渡<sup>リ</sup>良<sup>ノ</sup>文之許<sup>ニ</sup>因此<sup>ニ</sup>良<sup>ノ</sup>文居<sup>ニ</sup>住<sup>ス</sup>鎌倉之村岡<sup>ニ</sup>領<sup>ニ</sup>五箇<sup>ノ</sup>國<sup>ヲ</sup>子孫繁昌<sup>ス</sup>

### 【釈文】

彼の高望に十二人の子有り。嫡男国香常陸大掾、將門が為に誅さる。次男良望鎮守府の將軍、是將門が父なり。三男良兼上総介、將門と度々合戦を企て、終に討たれたる。四男以下は子無くして、子孫を繼がず。第十二の末子良文村岡の五郎、將門が為には伯父たりと雖も、養子と成り、其の芸威を伝ふ。將門は八箇國を隨へ、弥凶惡の心を構へ、神慮にも憚らず、帝威にも恐れず、檀に仏物を侵し、飽くまで王財を奪ひしが故に、妙見大菩薩將門の家を出でて、良文の許へ渡りたまふ。此れに因つて良文、鎌倉の村岡に居住す。五箇國を領じて、子孫繁昌す。

### 【校異・訓読】

1 原文に見る「芸」の前の「、」、汚れてはないが、訓み不明。

【注解】○彼の高望に十二人の子有り 以下の坂東平氏の系譜記事は、〈關〉の独自異文。〈關〉が記す国香・良望・良將・良兼・良文は多くの系図にその名が見えるが、他の諸系図に記される名としては、良生・良繇・良持・良広・良門・良房・良詮・常辰文次郎・駿河十郎・良茂（氏イ）。高望に十二人の子がいたとするのは、『千学集抜粹』（『妙見信仰調査報告書二』）に、「葛原第一の王子高望親王十二人の御子おはします、第一に良望親王；第十一には駿河十郎、其余ハ女子也」（六九頁）とある他、『千葉家系図 平姓』（千葉市立郷土博物館研究紀要7）に、「良文へ…高望十二之男猶子將門養子」（三九頁）、『妙見実録千集記』（妙見信仰調査報告書三）に、「高望親王…此親王御子拾二人在す、内二人女子也」（九二頁）、『般若院系図』に、「高望王へ…御子十二人。四男以下无<sup>レ</sup>子。不<sup>レ</sup>繼<sup>ス</sup>子孫へ」（統群書

6上―二二五頁）、『神代本千葉系図』（房総叢書一六六頁）・『徳島本千葉系図』（千葉市立郷土博物館研究紀要7、二七頁）・『平朝臣徳島系図』（同上二八頁）の「良文」の項に「高望十二之男」とある。これらの諸系図の中で、〈闘〉に最も近いのが、『般若院系図』（真野須美子）。先の「淳和天皇の御宇、天長年中の比……」の注解参照。○嫡男国香

常陸大掾、将門が為に誅さる（〈闘〉を除く『平家物語』諸本を初めとして、〈尊卑〉・『尊卑分脈脱漏』・『系図纂要』・『常

陸大掾系図』（続群書6上）・『千葉家系図 当寺世代 当寺実録』（千葉市立郷土博物館研究紀要9）・『妙見実録千集記』・

千竈文書『平氏系図』（鹿児島県史料）等では、国香の本名が良望。〈闘〉のように、良望と国香を別人物とし、国香は、

将門に討たれたとするのが、『般若院系図』（二二五頁）・『神代本千葉系図』（二六六頁）・『徳島本千葉系図』（二二七頁）・

『平朝臣徳島系図』（二二七頁）。『千学集抜粹』は、「第一に良望親王、第二には国香」と別人物とするが、将門の父を

良将とする。『神代本千葉系図』・『徳島本千葉系図』・『平朝臣徳島系図』は、いずれも九州千葉氏に伝来した系図で、

千葉系図の中でも古態を留めるものという。こうした系図の「原資料が制作されたのは千葉介頼胤の代、宝治合戦直

後の鎌倉時代の中期頃と推定され」、これが蒙古襲来の際に幕府の命令によつて九州の小城に下った「頼胤もしくは

子の宗胤によつて九州にもたらされ」という（丸井敬司①）。○次男良望鎮守府の将軍、是將門が父なり（〈尊卑〉

を初めとする多くの諸系図や『吾妻鏡』治承四年九月十九日条では、将門の父は、良将。前項に見たように、『千学

集抜粹』も同様。〈闘〉のように、父を良望とするのは、『般若院系図』（二二五頁）・『神代本千葉系図』（二六六頁）・

『徳島本千葉系図』（二二七頁）・『平朝臣徳島系図』（二二八頁）。『将門略記』『今昔物語集』（巻二五―一）『扶桑略記』『帝

王編年記』は、「良持」を父とするが、これは、訓の同じ「良望」と同人で、将門の父の名の古伝承を留めたものだ

ろう（〈全注闘〉上―二七頁、真野須美子）。○三男良兼上総介、将門と度々合戦を企て、終に討たれたんぬ（〈尊卑〉

や『将門略記』等によれば、良兼は、下総介。『将門記』によれば、良兼は、常には上総国にいたという（新撰日本

古典文庫2『将門記』五八頁)。その理由は不明だが、村上春樹は、上総介であったためとする。『系図纂要』(七下—四七六頁)・『桓武平氏系図』(続群書6上—一頁)には上総介。『神代本千葉系図』(二六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)に、「武蔵守従五下上総下総介」。(闘)の当該記事は、巻五の「上総介良兼と伯父甥不快の間、常陸国において合戦を企つる程に」(四ウ)と照応する。なお、『将門記』によれば、良兼は、天慶二年六月に病死している(九四頁)。

○四男以下は子無くして、子孫を継がず 嫡男を国香、次男を良望、三男を義兼とし、四男以下の子孫の系図を記さない点は、『般若院系図』(二二五頁)・『神代本千葉系図』(二六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)・『平朝臣徳島系図』(二七—二八頁)に同じ。○第十二の末子良文 良文を、十二番目の子とするのが、『般若院系図』(二二五

頁)・『神代本千葉系図』(二六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)・『平朝臣徳島系図』(二八頁)・『千葉家系図 平姓』(三九頁)・『千学集抜粹』は、「第三にハ良文」(六九頁)、『妙見実録千集記』は、「第五良文」(九二頁)。○村岡の

五郎『系図纂要』(七下—四七六頁)・『桓武平氏系図』(二頁)・『常陸大掾伝記』(続群書6上—四〇頁)・『千葉系図』(二五七頁)・『千学集抜粹』(七〇頁)・『妙見実録千集記』(九二頁)等は、「村岡五郎」に対して、『神代本千葉系図』(二六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)・『平朝臣徳島系図』(二八頁)・『千葉家系図 平姓』(三九頁)・『千葉大系図』(六頁)は、「村岡余五郎」。これは、高望の子良生が「村岡五郎」と名乗っていたことと関わりう。(闘)巻五には、「故に妙見大菩薩、将門の家を出でて、村岡の五郎良文の許へ渡りたまひぬ」(五ウ)とある。○将門が為には伯父

たりと雖も、養子と成り (闘)に一番近いのが『般若院系図』(真野須美子)。「良文雖為伯父、甥成将門養子」(二二五頁)。他に、良文が将門の養子になったとするのが、『神代本千葉系図』(二六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)・『千葉家系図 平姓』(三九頁)、逆に将門が良文の養子になったとするのが、『平朝臣徳島系図』(二八頁)・『妙見実録千集記』(九三頁)・『千葉系図別本』(続群書6上—一七〇頁)。良文が将門の養子であったとする虚構は、妙

見大菩薩が将門から良文に渡ったとされる妙見の靈威譚を作り出すために考え出されたものであろう(丸井敬司②)。

○芸威 他の用例未見。武威の意か。あるいは将門の人並み外れた武芸の意か。 ○将門は八箇国を随へ、弥凶惡

の心を構へ：妙見大菩薩将門の家を出でて、良文の許へ渡りたまふ 妙見大菩薩が、将門から良文のもとへ渡ったとされる靈威譚は、卷五の記事と呼応する。「将門妙見の御利生を蒙り、五ヶ年の内に東八ヶ国を打ち随へ、下房国相馬の郡に京を立て、将門の親王と号さる。然りと雖も、正直諂倭と還つて、万事の政務を曲げて行ひ、神慮をも恐れず、朝威にも憚らず、仏神の田地を奪ひ取りぬ。故に妙見大菩薩、将門の家を出でて、村岡の五郎良文の許へ渡りたまふ。良文は伯父たりと雖も、甥の将門が為には養子たるに依つて、流石他門には附かず、渡られたまひしなり」(五ウ)。

○檀に 「檀 モハラ、ホシママ」(天文本『字鏡鈔』二六七)。

○良文、鎌倉の村岡に居住す 良文が、鎌倉に居住したことを記すのは、『神代本千葉系図』(二六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)・『千葉家系図 平姓』(三九頁)・『平朝臣徳島系図』(二八頁)・『妙見実録千集記』(九四頁)・『千学集拔粹』(七〇頁)。

○五箇国を領じて「般若院系図」に同じ(真野須美子)。「将門(領)出羽奥州」。号「平親王」。領「東八箇国」。立「京相馬郡」。為「領」知日本国。兄将頼定「太政大臣」。良文雖「為」伯父、甥成「将門養子」。知行「五ヶ国」(『般若院系図』二二五頁)。良文は、将門の伯父であつたが、甥の将門の養子となり、五箇国を知行したの意。

### 【引用研究文献】

- \* 真野須美子 『源平閼諍録』の良文流平氏系図についての一考察(緑岡詞林一一号、一九八七・三)
- \* 丸井敬司① 「九州千葉氏伝来の系図について」(千葉市立郷土博物館研究紀要七、二〇〇一・三)
- \* 丸井敬司② 「千葉氏の武士団成立に関する一考察」(研究紀要(千葉市立郷土博物館) 1、一九九五・三)
- \* 村上春樹 『真福寺本楊守敬本将門記新解』二九頁(汲古書院二〇〇四・五)

## 【原文】

彼良文<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>四人子<sup>一</sup>嫡男忠輔<sup>先</sup>立父<sup>〇</sup>死去了二男忠頼村岡三郎号<sup>ス</sup>奥州介<sup>一</sup>為<sup>テ</sup>武蔵国押領使<sup>一</sup>領<sup>ス</sup>上総下総武蔵三ヶ国<sup>下</sup>総秩父之先祖也三男忠光駿河守<sup>云</sup>權中將<sup>依</sup>將門之乱<sup>被</sup>配流<sup>セ</sup>常陸国信太嶋<sup>仍</sup>云<sup>一</sup>常陸中將<sup>一</sup>赦免之後<sup>乗</sup>船<sup>著</sup>三浦<sup>嫁</sup>青雲介之娘<sup>押</sup>領三浦郡安房国<sup>三</sup>浦之先祖是也四男忠道村岡平大夫村岡<sup>為</sup>屋敷<sup>一</sup>領<sup>知</sup>鎌倉大庭田村等<sup>一</sup>鎌倉<sup>一</sup>先祖是也

## 【釈文】

彼の良文に四人の子有り。嫡男忠輔、父に先立ちて死去し了んぬ。二男忠頼村岡の三郎、奥州介と号す。武蔵国の押領使と為て、上総・下総・武蔵の三ヶ国を領す。下総・秩父の先祖なり。三男忠光駿河守をば權中將と云ふ。將門の乱に依つて、常陸国信太の嶋へ配流せらる。仍りて常陸の中將と云ふ。赦免の後は、船に乗つて三浦へ著き、青雲介の娘に嫁す。三浦郡・安房国を押領す。三浦の先祖是なり。四男忠道村岡平大夫、村岡を屋敷と為て、鎌倉・大庭・田村等を領知す。鎌倉の先祖是なり。

【注解】○彼の良文に四人の子有り『千学集抜粹』に近い。「良文に御子五人あり、長子忠輔、父にさきだちて失にける、二男忠頼、村岡二郎と申、三男忠光、權中將駿河守と申、四男忠通、梶原の祖鎌倉平太夫、五男景久長江太郎是なり」(七〇頁)。忠輔・忠頼・忠光・忠通を記す点、(尊卑)(4—一二頁)・『尊卑分脈脱漏平氏』(五上—一二七—八頁)・『桓武平氏諸流系図』(『奥山庄史料集』一七八頁)同。○嫡男忠輔 忠輔の夭逝を記すのは、『千学集抜粹』。諸系図に注記なし。忠頼は、二男であるものの、忠輔が夭逝したため、良文流の嫡流ということとなる。その忠頼流の嫡流に位置するのが千葉常胤。○二男忠頼村岡の三郎、奥州介と号す「村岡の三郎」、『神代本千葉系図』(一六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)・『平朝臣徳島系図』(二八頁)・『千葉家系図 平姓』(三九頁)同。

〈尊卑〉・『尊卑分脈脱漏平氏』・『系図纂要』(八上―二七頁)・『千学集拔粹』は、「次郎」・『桓武平氏諸流系図』は、「陸奥介・字岡村一郎」・「陸奥介」は、『続左丞抄』寛和三年一月二十四日付太政官符に確認できる(『全注閨』上―三〇頁)。なお、良文流平氏の忠頼や忠常と常陸平氏の平貞盛の弟繁盛や、その常陸平氏とは緊密な関係にあった貞盛流平氏との間には様々な紛争があったが(野口実①)、特にその点に触れられることはない。○武蔵国の押領使と為て、上総・下総・武蔵の三ヶ国を領す『千学集拔粹』にはない。『千葉大系図』に、「初号」経明。正四位下陸奥守。上総下総常陸介(一五頁)。忠頼流から、後に上総・下総・武蔵で覇権を競つた者達が出たことは確かだが、忠頼の時から既に上総・下総・武蔵を領国としていたかは未詳。○下総・秩父の先祖なり 正しくは、「下総・土肥・秩父の先祖なり」とあるべきところ(真野須美子)、さらに上総を加えるべきか。○三男忠光駿河守をば権中将と云ふ『千学集拔粹』ほぼ同。権中将は信用しがたい(『全注閨』)が、忠光の名は、『続左丞抄』寛和三年一月二十四日付太政官符に見えるし(『全注閨』上―三〇頁)、鎌倉末期の編と言われる『二中歴』にも、「陸奥介忠依、駿河介忠光(忠依弟)」と見えることから実在の人物であることは確か。忠光を記すのは、〈尊卑〉(4―三頁)・『尊卑分脈脱漏』(二二八頁)・『神代本千葉系図』(一六六頁)・『徳島本千葉系図』(二七頁)・『常陸大掾伝記』(四〇頁)。その内、〈尊卑〉・『尊卑分脈脱漏』を除いて、他系図では、忠光は、三浦の先祖とされる。○将門の乱に依つて、常陸国信太の嶋へ配流せらる『千学集拔粹』に、「三浦の祖三男忠光は将門の乱によりて常陸国に〔常州信田島といふ所也〕配流せらる、このゆゑに常陸中将と申、後赦免ありて船に乗りて三浦の郡〔三浦〕にいたり、安房国を知行して三浦に住せり、村岡四郎忠光と号す(父村岡五郎なればにや)」(七一頁)とある。将門の乱に加担した罪を問われ、常陸国に配流となったとするが、事実は未詳。信太の島は、霞ヶ浦の南岸にあった浮島(現茨城県稲敷市浮島)を指すか。かの地には、保元の乱の折、崇徳院方の藤原教長が流されている(『貧道集』)。○青雲介の娘に嫁す ほぼ同文関係にある『千学

集抜粹』には欠く、〈闘〉の独自異文。〈全注闘〉は、青雲介は仮名で、「相模の有力武士の三浦氏を、都から下向した王族平氏と在地土豪「青雲介」との招婿婚によって成立したと説く」（上―三〇頁）と解する。○三浦郡・安房

国を押領す 三浦義澄が安房国郡の案内者であつたこと（『吾妻鏡』治承四年九月三日条）や、頼朝が安房に上陸した時、最初に参向した安西氏は、三浦氏の分族と考えられるように、三浦氏が、三浦郡以外に、安房国へ進出し、勢力を扶植しようとしていたことは確かなこと（野口実②）。

○四男忠通村岡平太夫 『千字集抜粹』に、「梶原の祖ハ、良文の四男忠通村岡平太夫也、村岡に住し、鎌倉・大庭・田村を領して鎌倉の鼻祖なり」（七一頁）とある。良文の子として忠光が共に記される系図の場合、忠通（道）は、鎌倉の先祖（『神代本千葉系図』・『徳島本千葉系図』）とされるか、大場・梶原の先祖（『常陸大掾伝記』）とされるのに対し、忠光が記されない系図の場合、忠通（道）は、三浦の祖ともされる（『般若院系図』・『平朝臣徳島系図』）ことが多い。なお、『千字集抜粹』によれば、忠道は、良文の七騎として、将門・忠頼・忠光等と共に記される。ただし、忠光のように、将門の乱に加担したかどうかについては不記。

### 【引用研究文献】

\*野口実①『鎌倉の豪族―』七四頁（かまくら春秋社一九八三・一）

\*野口実②『坂東武士団の成立と発展』（弘生書林一九八二・12）

\*真野須美子『源平闘諍録』の良文流平氏系図についての「考察」（緑岡詞林一一号、一九八七・3）